2024.8.29 上毛新聞

点描ぐんま経済

日銀支店長 見聞録

■128■

盛り上がる夏祭り

社会の調和育む力に

先月、前橋支店長に着任した。本コラムを以前から存じ上げていたので、執筆ができることを大変光栄に感じている。

夏はお祭りの季節だ。その土地のことを知るためには、まず民俗に触れるべし。群馬初心者として、某民放テレビの「お祭り男」よろしく、知り得る範囲で行けるだけ出かけた。

いくつか挙げると、赤城山らんたん祭り、桐生祇園祭、大間々祇園まつり、沼田まつりなど。どのお祭りも、歴史や経緯に独自性があって勉強になっただけでなく、勇壮かつ優雅な御神輿（おみこし）や山車を見て楽しめた。何より、笛や太鼓、歌に掛け声に拍子木の音。お祭りのリズムに血がたぎる思いがした。地元の方々の盛り上がりに接し、当地にあふれるエネルギーにも感嘆した。

群馬県出身の民俗学者、都丸十九一さんによれば、「祭」には必ず「神」の存在があり、人の集まりを目的とした「祭礼」とは明確に区別する必要があるそうだ。

ただ、私が見たお祭りでは、民謡や天狗（てんぐ）（伝説？）などと融合させ、二つのタイトルを持つものもあり驚かされた。ひょっとしたら、上州人の多様性への許容度の広さを表しているのではないか。いずれにしても、お祭りは自由でいいのだ。

そもそもお祭りとは、自然や収穫、家内安全などに対する感謝やねぎらいを、コミュニティーが協同して表現するものだと思う。日々の暮らしに節目と弾み、彩りを添えるものでもある。こうした営みを行うには、社会にある程度の余裕のようなものがいると思う。人口減少で存続が難しくなったものも少なくないが、お祭りの社会文化的な意義が見直されていくことに期待したい。

御神輿を担ぐときの掛け声の一つに「わっしょい」がある。語源は「和」と「背負う」が結び付いたという説がある。お祭りで感じる自由や多様性、一体感の根底には「和」、他者への寛容さがあるように思う。

私たちを取り巻く金融、経済、政治は大きな転換点にある。こうしたときにこそ、お祭りのような営みが社会の調和やしなやかさを育み、難しいと思われる局面を皆で乗り越える原動力になるのではないか。

秋もお祭りの季節だ。「お祭り男」よろしく、当地のお祭りを積極的に楽しみたいと思う。

宮 将史（みや・まさふみ）
1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職